

グローバルイシューを考える  
グローバルイシューを解決する行動を導くには

東京大学大学院人文社会系研究科・社会学専攻  
ユリア・プライスナー（ポーランド）

1. はじめに

地球温暖化、環境汚染、遺伝子組換え生物の使用、世界的な金融崩壊の可能性といったグローバルイシューが世界中で話題となっている。このような問題について数多くの論文やドキュメンタリー映画が作成され、テレビでは毎日知識人や学者がお経のように「みなぎ協力し合わないと、この問題は解決できない」と警告を繰り返している。これを聞くと、誰もが真剣な顔をしながら、「この問題の解決に貢献しなくては」と決意するが、いつか過ぎれば、この気持ちは完全に消えてしまう。自分たちに解決する責任があるとは感じていないのである。したがって、最も深刻なグローバルイシューは人々がグローバルイシューを深刻に考えていないことなのではないだろうか。そこで、本論文では、どうしたら人々がグローバルイシューに意識を向け、協力する行動をとるようになるのかを考察したい。

2. なぜグローバルイシューを解決することは難しいのか

まず、なぜグローバルイシューの解決は容易ではないのか、という点から出発する。簡単に言えば、昔の社会は単に危険な社会であったのに対し、今の社会はリスク社会だからなのである。

著名な社会学者ギデンズとベックは、人間は昔から常時ある種の危険にさらされてきたと主張した。それは地震、洪水、火災といった人間以外の力によって引き起こされるもので、人がほとんど防げることができない自然災害として説明される。もちろん、今でも災害は起こるが、現代社会はそれに加えてリスクにさらされているというのである。リスクは危険とは異なり、人間・社会によって生み出されるもので、例えば、近代化プロセスにより引き起こされた環境汚染、新しく発見された病気、犯罪などが含まれるとされる。つまり、リスクの範囲は危険の範囲よりもはるかに広いのである。洪水や台風などの危険は多くの被害をもたらすこともあるが、通常は一つの地域に限定される。それに対し、原子力発電の利用、食物連鎖の腐敗、地球温暖化の影響、海の汚染、世界的な金融崩壊の可能性などは、国境を越えてよりグローバルなものであり、貧富の伝統的境界を越えている。災害といった危険も対応しにくい、地域に限定されるので、各国の政府によってそれぞれで緩和・対策できるのに対し、リスクを解決するためには一国の政府では、ほとんど太刀打ちできないだろう。したがって、リスクの解決と予防対策は各国政府のみが行うのではなく、社会全体、つまり全世界の人々によって引き起こされる必要がある。

### 3. グローバルな変化を起こすために何が必要なのか

では、どうすれば、人々がグローバルイシューについて考え、効果的に行動するようになるのか。社会学の理論史を辿ると、人の動機付けについていくつかの理論があり、この問題を考える手がかりになる。そこで、以下ではその軌跡を辿りながら考えたい。

#### 3.1. カール・マルクスとマックス・ウェーバーの理論

カール・マルクスは、人間が革命を起こす主な理由は経済的な状況、つまり、お金であると考えた。もしみなぎ経済的に平等な社会の中で共存するならば、人間の間には何も競争がなく、革命は起こらないというのである。しかし、お金持ちが少数しかおらず、彼らに搾取されて不満だと感じる労働者が数多くなれば、社会的な革命は起こりやすくなる。このマルクスの理論に鑑みると、比較的平等な先進国の社会では経済的な理由で革命を起こすのは非常に難しいということになる。これに対し、マックス・ウェーバーは、歴史上最大の社会的変化は経済的な理由によって引き起こされたものではなく、人々の態度・考え方の変化に伴って起こったと述べている。そして、『プロテスタント倫理と資本主義の精神』において、プロテスタント宗派の倫理は、歴史上最大の社会変化の一つである資本主義の台頭をもたらしたと主張した。

プロテスタント宗派とは16世紀にカトリック宗派に反対する運動から誕生したキリスト教の宗派のことである。この新たな誕生により、この二つの宗派の間には、宗教だけではなく、価値観に関する大きな相違点が生じた。

カトリック宗派は、信者に対し、教会の秘跡を受け入れ、聖職者に従えば、神様の救済が保証されるとしていた。しかし、プロテスタント宗派による改革はこのような保証を撤回した。プロテスタント宗派の基礎は予定説だったからである。予定説とは生まれる前から人は神様に救済されるかどうか決定されており、個人的な行為によりこの決定を変更できないというものである。信者らは心理的に、この新しい考え方に適応することは難しかった。信者らの行動は救済が保証されなくなったことで、救われたかどうかの「徴候」を探すことを最優先とするようになった。そして、この混乱を解決できたのはジャン・カルヴァンだった。カルヴァンは、職業で成功すれば、それは神様から恵まれた「徴候」だと感じることができ、救われる人として選ばれたと確信できるようになると主張した。職業で失敗したら、地獄に行くものと信じられるようになり、誰もが職業で成功するために頑張らなければならないという精神を鍛えるようになった。

#### 3.2. 人間の利己主義を利用した改革

では、なぜ資本主義が誕生したのか。それは、マックス・ウェーバーが主張するように、職業で成功することが社会的に認められるようになってきたからである。カトリック宗派における宗教的な献身とは、世俗的な財産の拒絶することで、豊かさとあらゆる所有物の追求は眉をひそめられ、罪としてみなされた。しかし、プロテスタント宗派による改革によっ

て、仕事や金融の追求が他者から高く評価され、社会的に望ましいものになった。この社会的な望ましさは重要な要因である。まさに、プロテスタント主義が無意識に人間の本質をうまく利用したことで、歴史上最大の社会変化の一つである資本主義の台頭が可能になったからである。人間の本質とは、利己主義的に社会的に望ましいという基準に同調することである。ホブズからサルトルまで多くの哲学者が、人間は根本的に利己主義者で自分の社会的なイメージに固執するとしている。『社会はなぜ左と右に分かれるのか—対立を超えるための道徳心理学』の中で著者ジョナサン・ハイトは古典ギリシャの哲学者の理論や現在における調査結果を取り上げながら、人間というものは誰かに見られていなければ、悪い行動を選択する可能性はほぼ 100%になると指摘している。しかし、人は通常は他人に見られているため、社会的に望ましい行動を選択する。プロテスタント主義はこの社会的に望ましいイメージを保護したいという人間の利己主義的な本質をうまく利用することで、効率的に長期的な変化をもたらすことができた。プロテスタント主義者は自分が救いに値するものだというを社会に見せたかったから、勤勉に働いていた。自分が救われたものと他人に見せたいという利己主義的な人間の欲望のためにおそらく社会の歴史の中で最も大きい変化が行われたとも言えるだろう。

### 3.3. 社会学の理論からの人間の行動改革への示唆

では、どのようにすれば、人々の考え方・行動を変化させられるのだろうか。プロテスタント宗派では職業で成功することが社会的に望ましい行動として評価された。これと同じようにグローバルイシューを考えたり、改善するために何か貢献したりする行動が、社会的に望ましい、あるいは品がある振る舞いとしてみなされるようになれば、グローバルイシューも解決できるようになるだろう。このような方法が功を奏した例として、ヨーロッパでの喫煙者の減少があげられる。健康の意識を広げるキャンペーンだけではなく、煙草を吸わない方が社会的に望ましいこととして宣伝されたことで、成功したと言われている。最近では、煙草を吸うことは、喫煙の影響について問題意識を持たない下層階級の人々の習慣としてみなされるようになり、煙草を断つ人数が増加し続けている。他のグローバルイシューについても同様のキャンペーンを実施すれば、人々の意識を喚起し、解決に向けた行動を導くことができるようになるのではないだろうか。

### 4. おわりに

要するに、これまでの人々の行動の変化を目指す多くのキャンペーンが影響力をほとんど持たないのは、人々の利己主義的な本質を考慮していないからである。人間は単に問題をそのまま突きつけられても、自覚できるものではない。上述した通り、人間は自らのことに結びつけられなければ、意識化はできないと考えるべきではないだろうか。例えば、カクテルを飲むために使用されたストローを海に流せば、亀を殺すかもしれないと、罪を意識化させようとしても、あまり効果がないだろう。なぜなら、亀は自分の親戚でもないし、誰とも

直接的な関係がないからである。もし「グローバルイシューを考える人は素敵な人」というように、グローバルな問題を人間の利己主義的な本質に結び付けるならば、より効果的な解決もできるのではないだろうか。今後はこのようなキャンペーンが実施されることが望まれる。

参考文献:

Beck, Ulrich, 1992, *Risk Society: Towards a New Modernity*, SAGE Publications Ltd.

ハイト, ジョナサン, 2014, 『社会はなぜ左と右に分かれるのか—対立を超えるための道徳心理学』, 高橋洋訳, 紀伊國屋書店.

ヴェーバー, マックス, 1989, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 大塚久雄訳, 岩波書店.

YouTube 「POP CULTURE: Taylor Swift's Legs & Climate Change」

<https://www.youtube.com/watch?v=R45wnNkeuCA>

(2018/10/1 閲覧).

The Guardian ウェブサイト 「If you believe studies into selfishness, we are all terrible people」

<https://www.theguardian.com/commentisfree/2017/oct/29/selfishness-we-are-all-terrible-people-arwa-mahdawi>

(2018/10/1 閲覧).